

やきもの(窯業)

堺の丘陵部(きゅうりょうぶ)は粘土が多く、それを使ったさまざまなやきものが生産されてきました。
地産地消の枠を超え、全国へ流通したのも多く作られた
堺のやきもの歴史をたどってみましょう。

古墳時代

陶器のルーツとされる須恵器(すえき)の技術が日本に伝わったのは古墳時代(5世紀頃)。その技術とは、窯(かま)で焼くことが最大の特徴で、1000度を超える高温で焼かれました。『日本書紀』に書かれた古い地名「茅渟県陶邑(ちめのあがたすえむら)」が現在の泉北エリア及びその周辺にあたとされており、丘陵部では多くの須恵器の窯がみつかっています。古来堺(現在の市域をいう。以下同)の地で須恵器が盛んに生産されていたことを物語っています。



仁徳天皇陵古墳:写真提供 堺市



5世紀ごろの須恵器:写真提供 堺市博物館

平安時代

須恵器生産に必要な薪の不足などにより、約500年に及ぶ須恵器生産が下火になりました。

器表に燻しをかけた瓦器(がき)が11世紀に登場し、堺では14世紀まで生産されました。種類は碗と皿が多かったようです。

室町時代

明徳3年(1392)の年号を記す河南町弘川寺の鬼瓦には「いつみのくにふかいのきやう三郎さく也」と記されていて、堺周辺で生産されていたことがうかがえます。

甕(かめ)、釜、すり鉢としての土器は、15世紀には瓦質土器が、16世紀以降は土師質土器が全盛となり、中区八田荘あたりで盛んに生産されたようです。

安土桃山～江戸時代

堺区西湊町付近で16世紀には生産されていた「焼塩壺(やきしおつぼ)」は、17世紀に全盛となりました。全国的に流通したようで、各地で生産された多くの類似品が出回ったとされます。



17世紀以降、城、寺社のほか町家に瓦葺(かわらぶき)が普及するようになり、瓦の生産量が増加しました。堺瓦は江戸城、大阪城、萩城、和歌山城などでも用いられました。



堺瓦刻印
:写真提供/堺市博物館

さらに、17世紀から生産されていたと云われる「湊焼」は19世紀に全盛をむかえ、茶陶(ちゃとう)を多く生産しました。

中区八田荘あたりでは、ほうらく、壺、甕(かめ)が18世紀までは生産されていました。

18世紀初頭には、すり鉢(堺搦鉢(さかいすりばち))が生産されるようになり、一見備前焼(びぜんやき)と思われるような高品質な品は全国を席卷したようです。18世紀が全盛で、19世紀まで生産が続きました。



湊焼茶碗:写真提供/堺市博物館

明治～大正

瓦やすり鉢の生産技術を生かし、明治に入り近代土木建築用材としてのレンガ生産にいち早く取り組んだ堺では、多くのレンガ会社が操業しました。

しかし、関東大震災を境に、建築物がレンガからコンクリートに替わり、レンガ工場は減少していきました。